

天安門事件、紙面作りの原点

■新編集講座 ウェブ版 第150号 2020/6/15

毎日新聞社 制作技術本部長（元・大阪本社編集制作センター室長） 三宅 直人

中国で市民の民主化要求を政府が武力鎮圧した1989年6月4日の天安門事件＝右欄参照＝から31年。私はこの時、大阪本社整理部（現・編集制作センター）の編集者として、同時進行で紙面を制作しました。一連の経緯には、準備、当日の決断、見出し表現、冷静な判断などの様子が詰まり、報道の原点です。これまでのご報告＝「新編集講座」29、53、125各号＝の中から、紙面制作の要点をまとめてみました。

■ 予兆をとらえ、資料を整備

この年の北京は春から民主化運動が高揚し、市民や学生が天安門広場でデモや集会を実行。中国政府は戒厳令で対抗しました＝図①。これは予兆です。流血の惨事まで予期したわけではありませんが、平穩に済まない印象はありました。

整理部では、中国要人の略歴や立場まとめ、年表、天安門付近の地図、デモや集会写真など基礎資料を準備しました。何かあった時、すぐ紙面に使えるようにするためです。

こうして迎えた事件前日の6月3日。私は翌4日付朝刊を制作するため、午後出社しました。当時の国内は、リクルート事件で竹下登首相が退陣。宇野宗佑首相が誕生したばかりでした。当日の早版も、1面トップは政局原稿でした。

■ 瞬発力と決断、最大限の扱いに

中国情勢は、夕刻は大きな動きもなかったのですが、日付が4日に変わった頃から「軍が天安門広場に向かった」「学生を襲っている」という情報が入ってきました。インターネットもなく、頼りは特派員や通信社が伝える断片情報だけ。13版（最終版の一つ前の版）1面に短い記事をつっ込みました。

さらに、東京から「軍が市民に発砲した」「学生を狙って水平撃ちしている」と緊迫した声の連絡。大阪の1面デスクは「これは歴史に残る大事件」と、14版（最終版）は最大限の扱いにすることを決断。ぶち抜き（紙面の端から端まで）の見出しにしました＝図②（事前に用意した地図が役立ちました）。

東京の1面も天安門がトップですが、政局の連載を左側に抱え窮屈です＝図③。大阪も13版まで連載を1面掲載していましたが、14版で中面に回す決断をしたのでした＝右欄参照。

天安門事件 1989年4月から北京・天安門広場を中心に学生や知識人の民主化要求運動が繰り広げられ、6月4日未明に軍が武力鎮圧した事件です。中国政府は死者数を319人としていますが、異説もあり、実態は不明です。



（上）②89年6月4日 朝刊1面（大阪）

（下）③同日 朝刊1面（東京）



政局の連載 大阪本社は、13版まで1面に掲載した政局連載を14版で3面に移して、1面で天安門事件に使えるスペースを広げました。東京本社はそうしませんでした。



3面に大型インタビューがあり＝左図、連載を移す余地がなかったからです。大阪は14版でインタビューを外し、跡地に連載を入れました。緊急時の重要な決断でした。

■ 歴史を刻む、見出しのセンス

一方、見出しのセンスでは、東京紙面に軍配が上がります。

翌5日付の朝刊1面は、大阪の見出しが「武力鎮圧、死者2千人超す？」なのに対し=図④、東京は「天安門デモ 武力鎮圧」でした=図⑤。東京は、事件の発生場所でもあり、民主化の象徴でもある「天安門」をきちんとメイン見出しに入れ、その後に続く「武力鎮圧」と合わせ、事件の全体像を伝えています。

発生当日のメイン見出しも、大阪が「戒厳軍が市民に発砲」=図②、東京が「軍、天安門広場に突入」でしたね=図③。

節目の際、メイン見出しには、記事の「主題」（この例なら「天安門」）を入れるのが「見出しの文法」です。大阪は、当日の動きというミクロの視点では正しいのですが、「新聞は歴史の記録」というマクロの視点では東京が優れています。

■ ニュースは重なる、ホメイニ師死去

ところで5日の朝刊1面には、「ホメイニ師死去」という大見出しが、大阪紙面にも=図⑤、東京紙面にも=図⑥、顔をのぞかせています。1979年にイランで帝政を打倒したイスラム革命の精神的指導者で、革命後は元首を務めた人物の死です。通常なら1面トップ級の訃報ですが、この状況では、1面に見出しと顔写真を出すのがやっと。詳細は中面に回しました。

大ニュースは不思議と重なります。古くは、三井三池炭鉱爆発と国鉄鶴見事故（1963年）が知られますが=図⑥、2日続きの国内航空機事故（1966年、羽田と富士山）や、ホテルニュージャパン大火翌日の日航機墜落（1982年）という例もあります。

■ まるで「三国志」、冷静な判断欠き

天安門事件に戻ると、軍が武力鎮圧に踏み切った以降、「軍同士 交戦の情報」「北京市内、内戦の危機？」や=図⑦、「北京 一部で市街戦」「本隊、衝突の危機」など、刺激的なニュースが続きました。「楊尚昆（ようしょうこん）国家主席（軍事委副主席）に忠誠を誓う二七軍（山西省大同駐屯）を主力」にした戒厳軍と、「学生、市民への流血の弾圧に反対し戒厳軍に対し決起した」「首都防衛軍である三八軍（河北省保定駐屯）」の対立（89年6月6日夕刊）とは、まるで「三国志」の世界です。

でも、政府や軍内部に意見の違いや不協和音はあったのですが、現実には軍分裂も、内戦も起きませんでした。報道する側の事実確認や冷静な判断が十分でなかったと思います。

今、中国政府は「国家安全法制」可決など、香港への統制を強化しています。天安門事件では、以前から情報統制を図っています=右欄参照。こういう時代だからこそ、現代史を語り継いでいく必要があるし、その際は事実確認が重要になります。



(上) ⑦89年6月6日 朝刊1面 (大阪)



④89年6月5日 朝刊1面 (大阪)

⑤同日 朝刊1面 (東京)

(左) ⑥63年11月10日 朝刊1面 (東京)